

誌上再現 男女共同参画基礎講座

序に代えて

人間文化研究所

所長 関根 靖光

ほぼ 100 年前のアメリカで、新世紀に相応しい家政学が提案されました。それが、ホーム・エコロジー（敢えて意識すると、「家庭生活エコロジー」）です。名付け親は、女性の化学者 エレン・リチャーズです。いま二つの同心円を描いてください。小さい内円の中に、「ホーム」或いは「家庭生活」という字を入れてください。そして、内円と外円との空間全体を、その家庭を取り巻く「環境」とみなしてください。ホーム・エコロジーとは、より良いホーム、つまり、より良い家庭生活を実現するために、ホームと環境との相互作用を調査・研究して、必要あれば環境を改善する、という理論的且つ実践的な学問のことです。例えば、家庭で消費する飲料水に衛生的な面で問題があるかないかを水質検査し、もしそれが飲料に向かないならば水質を改善して家庭生活に資する飲料水に変えるといった具合です。ホーム・エコロジーという名称は、もちろん 19 世紀後半に誕生した新しい生物学、エコロジーからインスピレーションを得てつけられたものです。エコロジーの定義は、「生体と環境との相互作用を研究する学問」というものですから、その「生体」の代わりに「ホーム」を設定して、ホーム・エコロジーとしたわけです。

さて、この名称は実は公式名とはなりません。仲間から、この学問名では一般に分かりにくいだろうとの指摘があったからです。それで、ホーム・エコノミクスとなりました。しかし、名称はどうか、エレン・リチャーズの精神は、脈々と受け継がれていったのです。家政学は、家庭生活を構成する衣食住に研究の焦点を当てるだけでなく、環境との相互関係も考慮にすべきものとなりました。これが二十世紀から今日に至るまで、アメリカ家政学のみならず国際家政学の主潮流となった家政学の概念です。

エコロジーという学問の影響は、家政学にとどまりません。人文・社会科学にも新しいパラダイムとして取り入れられ、総じて「ヒューマン・エコロジー」という一種の世界観となりました。文化、歴史、地理、経済、政治、社会等々を、「人間と環境、それも自然・社会・文化という 3 環境との相互作用」という大きな視点から調査・研究するわけです。リチャーズの「ホーム・エコロジー」は、この「ヒューマン・エコロジー」の一部門、すなわち、人間の家庭生活を中核としてそれと 3 環境との相互作用を研究するタイプのヒューマン・エコロジーである、と言ってよいでしょう。

ところで本学の人間文化研究所は、この 5 年間、ヒューマン・エコロジー的パラダイムを意識して種々の活動を展開してきました。しかしただ中立的に調査・研究するものではありません。リチャーズの精神を活かして、「人間生活を質的に向上させる」という目的で、人間生活と環境との相互作用を研究し、環境の改善もはかる」という実践的側面も色濃くもっているのです。

誰であれ、人間らしい生活に悪影響を与える 3 環境は改善されるべきです。しかし、環境の良し悪しの問題は、「人間らしい生活」とは何か、という問を提起します。人間である限り、「人間としての尊厳を保ちつつ、生き生活し人生を全うする」ための必要条件とは何か。その人自身の心の有り様とか態度や行為などの内的条件は？そして外的な環境条件とは？もし人間を取り巻く環境に、人が「人間らしく生き生活し人生を全うする」ことの阻害要因があれば、その要因を取り除き環境を改善する手だてをとるべきでしょう。

いま、人間性一般の観点から「人間らしい生活」の条件について言及しました。しかし人は、男性であったり女性であったり、高齢であったり児童・幼児であったり、健康であったり病人や要介護であったり、心身に障害があったり健常であったり、結婚していたりシングルであったり、正規雇用者であったり非正規雇用者であったり、富裕であったり貧困であったり、します。

そのそれぞれの人間としての在り方を、例のヒューマン・エコロジーの同心円システムの内円のところに置き、それと環境、特に社会・文化環境との相互作用に目を向けてみると、突然、それぞれに固有の阻害要因を環境のなかに見出すことができます。例えば、高齢者であれば、「人間として尊厳を保ちつつ、生き生活し人生を全うする」ことの阻害要因、さまざまなバリアを環境のただ中に感じ取ることができます。障害者であれば、自分をとりま

く生活環境の中に、健常者が気づかない阻害要因をまざまざと感ずることでしょう。

本研究がこの4年間、埼玉県男女共同参画推進センター（通称、With You さいたま）、そして昨年、群馬県のぐんま男女共同参画センターとの共催で行った男女共同参画基礎講座は、ヒューマン・エコロジー・システムの内円に「女性の生活」を置いて、その観点から環境との相互作用を考察する試みであったと言えます。すると突然、現代の日本の社会・文化環境のうちに、「女性が、人間としての尊厳を保ちつつ人間らしく生き生活し人生を全うする」ことを阻害するさまざまな要因を見出すことができます。見出すというよりは、痛々しく体験していることに改めて気づく、と言った方がよいでしょう。

この「女性」に、「高齢」とか「非正規雇用」とか「シングル」などの条件を重ねると、女性が「女性性」というだけでなく、いかに複合的に人間としての尊厳を阻害されているかが見えてきます。例えば、「高齢でシングルの独居女性」は、平穩に見える日常環境からどれほど深く侵食され疎外されていることか。

さて男女共同参画基礎講座の目的ですが、それはこのような環境の阻害要因を指摘し解説するだけでなく、エレン・リチャーズのホーム・エコロジーの実践性を範として、環境を改善する道を示唆し、可能ならば具体的な改善策を提起し、受講者に対して共に考え共に行動するよう提案します。

今回、紀要の特別企画として、With You さいたまで最初に開催された男女共同参画基礎講座の一部を誌上再現しました。講師の先生方には、ご多忙にもかかわらず、テープ起しの長文原稿の編集などいろいろとご尽力いただき、この場を借り深く感謝の意を表す次第です。

With You さいたまの最初の男女共同参画基礎講座は以下の通りです。

第6回目の福沢恵子氏、第7回目の樋口恵子氏の講座は残念ながら今回の紀要には掲載されておりません。講師の肩書きは当時のもの（カッコ内は現在の職位）。

1 回	平成20年12月15日 落合恵子 東京家政大学人間文化研究所特任教授 「異議申し立ての権利～スカート裾からガラスの天井まで～」
2 回	12月22日 青木幸子 東京家政大学教職教養科長（教員養成教育推進室長） 「学校の教科書とかくれたカリキュラム」
3 回	平成21年1月19日 金城清子 龍谷大学法科大学院教授 「ジェンダーと法」
4 回	1月26日 関根靖光 東京家政大学人間文化研究所所長 「性別役割分担論の基本形～クセノボーンの家政論におけるジェンダー～」
5 回	2月2日 杉浦浩美 東京家政大学人間文化研究所非常勤講師 「職場とマタニティ・ハラスメント」
6 回	2月12日 福沢恵子 ジャーナリスト・日本女子大学客員教授 「女性と税金～ジェンダーの視点で税の仕組みを考える～」
7 回	2月16日 樋口恵子 東京家政大学名誉教授 初代人間文化研究所所長 「戦後の女性の歩み～変わったこと・変わらないこと・これから変えること」